令和4年度
キャリア教育・就職支援ワークショップ

2022年12月15日（木）・ 16日（金）

ラップアップミーティング
今後の大学等におけるキャリア支援は何をすべきか

ワークショップ テーマA「低学年からのキャリア教育」、 ワークショップ テーマB「コロナの時代を過ごした学生と、どう向き合っていくか」の後に実施されたラップアップミーティングの内容をご紹介します。進行役である九州産業大学の聞間氏からは「大学等におけるキャリア支援は何をすべきかを、大きな観点から考える時間にしたい」と冒頭挨拶がありました。

全体共有 - テーマA -

Topic

低学年からのキャリア教育

まず初日に行われたテーマ A「低学年からのキャリア教育」について、ファシリテーターを務めた筑波大学の立石氏より、グラフィックレコーディングを参照しながら報告がありました。

最初に全体でどのような課題意識があるのかを確認した後、企業参加者の方々から自己紹介をいただき、グループワークに進みました。企業参加者のなかには、すでにさまざまなサービスを行っている方や大学の低学年よりも若い高校生とさまざまな取組を行っている方もいて、これからさらに学校との関係を深めていきたいという話が出ていました。「社会人と接するハードルを下げ、親しみを持って学生を迎えたい」「働き方は一つではないことを学生に伝えたい」といった発言もあり、グループワークにおいて、充実した議論が行われていました。

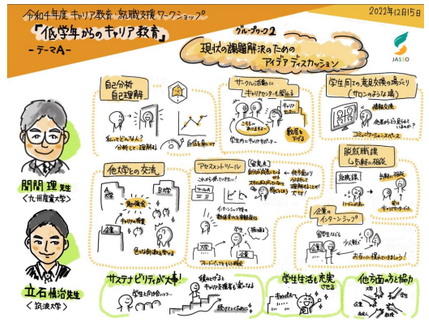
テーマA - グループワーク1 現状課題の共有 -

グループワーク1回目では、低学年のキャリア教育の現状の課題を共有しました。多くの学校参加者から「学内イベントへの参加率の低さ」が共通の悩みとして挙がりました。

「本当に届けたいサービスがあるにもかかわらず、学生にリーチできない。」「オンライン化が進み人間関係が希薄になり、学生に関わること自体が難しくなっている。」といった悩みを多くの学校が抱えているようでした。

議論をすすめる中で、「学生自身をもっと理解していく 必要があるのではないか」「実際にサービスを届けたい人たちは誰なのかを、もっとしっかり認識する必要があるのではないか」との意見が出ていました。

テーマA - グループワーク2 課題解決のためのアイデア -



1回目の意見を踏まえ、解決方法を考えたのがグループワーク2回目です。ここでは、課題解決に繋がるアイデアや事例の共有をしながら意見交換をしました。

学校側のアイデアとして挙がったのは、学生がキャリアセンターと関わる際のハードルを下げていくというものです。低学年の学生にとって、「就職課」のイメージが強いところはハードルが高いと感じてしまう傾向があるようです。

もっと気軽に相談できる「サロン」のような場を作ったりしても良いのではないか。学生サークルなどと連携し、身近な繋がりの中で自然にキャリアセンターのサービスにつなげていくのはどうか。などといった具体例を紹介しながら、活発な意見交換が行われました。

「他大学と交流しながら、キャリアについての勉強会を行う」「他大学の学生と一緒に企業のインターンシップに参加する」などといった学外との交流に期待する声も挙がっていました。

テーマA - まとめ -

各学校のキャリアセンターが直面する課題について、関係者だけで取り組むのではなく、さまざまな人と協力しながら展開していくことが大切だと立石氏は言います。このような取組が学生を多面的に支え、学生生活自体の充実に繋がっていくからです。学校側やキャリアセンターがこういった取組を続けていくためには、サステナビリティの観点でも注意すべきであると話しました。

報告を聞いた住田氏は、低学年からキャリア意識を持つことは、非常に重要になってくると話しました。就職対策という意味ではなく、学生たちが学校で学ぶ意図を理解しモチベーションを維持するために、キャリアセンターのメンバーも関わっていくことが大切である。「それは自分たちの仕事ではない」といった意識ではなく、学生と一緒になって考えていくことが必要だと述べました。

令和4年度 キャリア教育・就職支援ワークショップ ラップアップミーティング

Copyright © 2022 JASSO. All rights reserved.
Copyright © 2022 JASSO. All rights reserved.

全体共有 -テーマB -

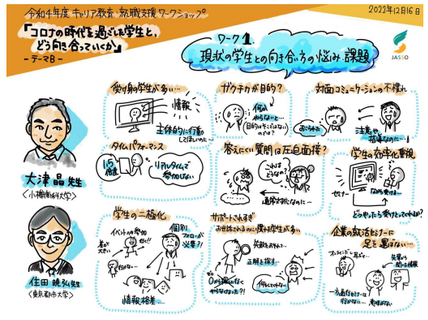
Topic

コロナの時代を過ごした学生と、どう向き合っていくか

テーマB「コロナの時代を過ごした学生と、どう向き合っていくか」について、ファシリテーターの大津氏より報告がありました。テーマAとテーマBは入り口こそ違いますが、議論の内容に符合する部分が多く、根っこのところではかなり繋がっていると話しました。

テーマBでは、はじめにいくつかの事例紹介がありました。①学生の学業での努力やそこで得た力をしっかり企業に伝えていく ②「学習内容」と「履修履歴」を入り口に学生を理解し、学生がどのような汎用的能力を身につけているかを見極める。ここから議論がスタートし、それがテーマBの議論を深めるきっかけになったと述べました。

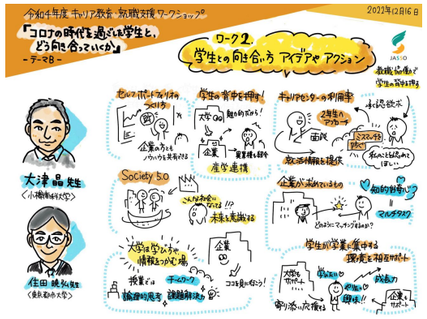
テーマB - グループワーク1 現状課題の共有-



グループワーク1回目では、現場の学生と向き合う中での悩みや課題を共有しました。
各学校の専門性や地域規模によって、幅はあるものの、昨今の学生の行動パターンに関する悩みは共通のようです。コストパフォーマンス、タイムパフォーマンスなど効率化を重視する学生が増えていること、情報に対して受け身の学生が多くなっていることなどです。
数多くの課題、悩みが寄せられた中で、特に「コミュニケーション」が大きな課題として浮き彫りになりました。オンライン授業などの影響もあり対面でのやりとりに慣れておらず、コミュニケーションの力が弱くなっている。そのため大学キャリアセンターが主催するガイダンスやセミナーに人が集まらない、企業が主催するセミナーに学生が足を運ばないなどの悩みが出ています。

Copyright © 2022 JASSO. All rights reserved.

テーマB - グループワーク2 課題解決のためのアイデア -



グループワーク2回目では、コミュニケーションの課題をどう解決していくのかについて、意見交換が行われました。学校あるいはキャリアセンターと学生、企業と学生、そして企業と学校間のコミュニケーションについて、事例を交えて話し合い、さまざまな解決策が提案されました。
「お茶を飲みながら気軽に学生と話をするなど、キャリアセンター以外の場所においても学生との接点を設けていく」「卒業生や内定者など先輩たちを巻き込んでいく」「授業やゼミに入り込んで学生との接点を作っていく」といった取組が紹介されました。
学生の変化が話題になる中で、住田氏は学生の背中を押してあげることも重要だと言います。できていないことを指摘するよりも、「こんなことができている」「これにチャレンジしてみたらどうだろう」など、認める部分を増やしていく。その役割をキャリアセンターが果たしていくのも良いのではないかと語りました。
大津氏も、多くの気付きがあったと言います。新型コロナウイルス感染症のまん延は、たしかに大きなインパクトやダメージがあったのかもしれない。けれども、これは一過性のものではない。コロナ禍の前から起きていた変化が加速しただけなのだと。新型コロナウィルス感染症の状況が落ち着いたとしても、いま向き合っている課題はこの先も続く変化だろうと話しました。

いま大講堂でただ知識だけを提供しているような授業は不要との議論がありますが、同じことがキャリア支援でも起きています。今後のキャリア支援はどのような形で展開していくべきなのか、議論を続けていく必要がありそうです。

テーマB - まとめ -

ゲストの佐々木氏は、次のように話しました。
コロナ禍の潜在的な影響が見えない中、コロナ禍前の社会を知らない学生たちは不安を感じています。世の中に対して懐疑的になり、先がわからないことに対して「変化に対応できるようになりなさい」「そのやり方は自分たちで考えなさい」と言われてしまい、まるで放られているかのように感じているかもしれません。
キャリアセンターのイベントに来ないとはいえ、彼らは働き方や生き方を我々以上に意識し、比較しています。自分に合った働き方や生き方を大学生活の中で明確にできない中、彼らが一番認識できるのが就活テクニックであり、その情報やノウハウを知りたがっているのです。
だからこそ、いまキャリア教育的な視点を持ったキャリア支援が求められているのだと思います。
コロナ禍で社会に出ることが学生たちの楽しみではなくなってしまっているいま、若い人たちに、社会に出て働くことは面白くて楽しくて自分を成長させるものだといかに感じてもらえるか。
そこを企業と学校が一緒になって示してあげることが必要ではないでしょうか。どんな見せ方をすれば彼らが希望を持てるか、そこを一緒に考えていきたいです。

Copyright © 2022 JASSO. All rights reserved.

グループワーク

テーマA、テーマBの内容共有の後、参加者は4～5名ずつ14のグループに分かれ、グループワークを行いました。「今後の大学等におけるキャリア支援は、何をすべきか」をテーマに現状の問題点や何ができるかについて、意見交換を行いました。

Topic

キャリア支援に必要なこと・課題

「キャリア支援のイベントをオンラインで行ってもなかなか学生が集まらない」という悩みが、複数の学校参加者から共通して出ています。特に規模の大きな学校からは、全体的な支援にすれば対象が広く浅くなってしまうこと、スポット的なイベントは周知が難しく手応え感が薄いことが挙がりました。
また、ポスターとポータルサイトやメールマガジンだけでは、イベントの周知が行き届かないのではないかと、根本的な問題にも話がおよびました。これに対し、学生がよく使うツールを介することが有効ではないかとの声も挙がっていました。

キャリア支援については、「全体での総花的な支援から個に対するきめ細やかな支援へ転換していく必要性を感じている」と話す担当者もいました。コロナ禍の影響か、コミュニケーションが取りにくい学生が多くなっており、人と話さなくても良い職業に就きたいといった声まで出ていると言います。「今までは、そのような声を聞くとすぐにキャリア支援側が選択肢を狭めてしまっていたことに気付いた。今後は学生の可能性を潰さないで前向きに考えて伸びる支援を心がけたい」と、抱負を述べていました。

ある大学からは、小規模である良さを生かし、4～5名規模のオンラインランチ会やティーパーティーを行っているとの報告がありました。10回の企画がほぼ満席であったこと、低学年の参加者もあり、参加後にSNSなどを用いて先輩と後輩の繋がりもできはじめているそうです。担当者は「さらに1、2年生からの支援に力を入れていきたい」と話し、他大学からも、サロン型のイベントを参考に取組を広げたいとの声が挙がりました。

企業参加者からも意見が出ました。「イベントを行っても特典目的で決まったブースにしか行かないなど学生のマイナスイメージが聞かれるけれども、インターンシップで受け入れると、良いところがどんどん見えてくる。ミドル世代は、若者の弾けたい気持ちをまず理解し、遊び楽しむといった目的意識から可能性を広げていくのが良いのではないか」またキャリア支援側においても「遊びから生き方、楽しみ方を教えるといった視点を持ち合わせても良いのではないか」と話が広がりました。

登壇者によるコメント

25分間のグループワークを終え、最後に登壇者5名からのまとめの言葉をご紹介します。

Copyright © 2022 JASSO. All rights reserved.

佐々木 ひとみ
Sasaki Hitomi
元早稲田大学
常任理事

佐々木氏は「これから少子高齢化になり若者はますます貴重な存在になりますので、社会全体で若者を育てていく視点が大切だと思います。どんな見せ方をすれば学生たちが将来に希望を持てるか、社会に出たいと思ってくれるか、企業や大学が一緒になって考えていけたら素晴らしいです」と語りました。

立石 慎治
Tateishi Shinji
筑波大学
教学マネジメント室 助教

「キャリア教育はこちら側の学びだ」との言葉を金科玉条にしている立石氏。「グループワークで『相談に来てくれた学生に、これまでと違った見方、接し方ができるのではないか』との発言があり、素晴らしいと感じました。我々も一緒に成長していく姿勢があれば、一歩も二歩も前に行けるはず。明日からと言わず、今日からその思いで過ごしていきたいです」と語りました。

大津 晶
Ohtsu Sho
小樽商科大学
商学部社会情報学科教授

「もはや、ガイダンスに何人集めるかではない。我々は新しい世界観を持たなければならない」と話す大津氏。明日から自分には何ができるかを考えさせられたと言います。「すべてのことをキャリアセンターが抱えるのではなく、全学の組織、さらに地域や企業と連携しながら、学生中心のキャリア支援を行っていく。そして一人ひとりに寄り添い、キャリアセンターを再定義していくことが大事だと思います」と語りました。

住田 曉弘
Sumida Akihiro
東京都市大学
学生支援部長

「学生たちに夢を持たせたい。この先に楽しいことがあると感じてもらいたい。その役割を担うことは大きいですよねと話していた方々が印象的でした。企業の皆さんにも入ってもらいながら、改めてキャリアセンターの役割を考えていく必要があると思います。そして教職協働で進めていく環境が必要になってくると感じました」と住田氏は語りました。

聞間 理
Kikima Osamu
九州産業大学
商学部教授

聞間氏は、キャリア支援の課題について「単に担当職員の問題にとどまらない、学校全体で考えていくべき問題」と語りました。「学生についてわかっていたつもりで、わかっていなかったのかもしれない。学生の目に我々の目を重ねながら一緒に考えていくことの大切さを感じた時間となりました」と語りました。
最後に「このワークショップの成果を周りの方々に伝え、我々の抱えてきた問題意識を広げていってほしいです」と、次年度への期待も込めて参加者に呼びかけました。

Copyright © 2022 JASSO. All rights reserved.